

令和7年度 名古屋市芸術賞受賞者の概要

芸術特賞 木下 信三（90歳） 文芸（文学調査）



昭和9（1934）年、名古屋市生まれ。昭和41（1966）年に個人雑誌の刊行を開始して以来、独自の視点から文学研究と執筆活動が続けている。昭和45（1970）年からは、俳人・種田山頭火の実証的研究を志し、全国各地に残る足跡を丹念に追查するなど、精緻な研究活動が続けてきた。これまでに「山頭火伝」「山頭火虚像伝」「山頭火の細道」「山頭火空白帖」など多くの著作を発表し、山頭火研究の深化と再評価に大きく貢献している。

昭和45（1970）年には、同人誌「北斗」創刊主宰者の一人である木全圓壽氏の誘いを受け、名古屋近代文学史研究会（現・愛知近代文学史研究会）に参加した。以来、名古屋の近代文学史の掘り起こしと研究に半生を捧げ、木全氏没後は同研究会を牽引し、地域に根差した文学研究の中核的存在として、後進の育成と研究活動の継続に大きな役割を果たしている。

さらに、亀山巖氏（明治40（1907）年－昭和64（1989）年／元中日新聞取締役・編集局長／公益財団法人名古屋市文化振興事業団設立者）との深い信頼関係のもと、同氏より譲渡された数多くの貴重な文学資料を整理、研究するとともに、それらを本市に寄贈してきた。これらの資料は、名古屋近代詩の隆盛期を支えた詩人や文学者たちの文学思想の動向を明らかにするものであり、学術的、文化的価値の極めて高い資料である。

令和2（2020）年には、未発表原稿や私信などを収録した「亀山巖のまなざし 雑学の粹人モダニスト」を出版。名古屋の文学文化を多角的に捉え直す成果を世に示した。

木下信三氏の長年にわたる研究活動と貴重な文学資料の寄贈は、本市の文化的資産の充実に大きく寄与するとともに、地域の文学史研究および文化芸術の振興に多大な貢献を果たしてきたものであり、その功績は顕著である。

令和7年度 名古屋市芸術賞受賞者の概要

芸術奨励賞 いとう みゆき
伊藤 美由紀（56歳） 音楽（作曲）



平成7（1995）年に愛知県立芸術大学音楽学部作曲科を卒業、平成10（1998）年マンハッタン音楽院修士課程を修了。その後、文化庁芸術家在外研修員として、フランス国立音響音楽研究所（ircam）で研鑽を積む。博士課程では現代音楽を代表する作曲家トリスラン・ミュライユ氏に師事し、コロンビア大学で博士号を取得した。

平成16（2004）年にはゆめたろうプラザ響きホール（愛知県知多郡武豊町）での開館記念演奏会にて初演を披露。以降も活躍の場を広げ、ミュージック・フロム・ジャパン（ニューヨーク）、愛知芸術文化センターなどからの作品委嘱を受けるほか、国内外の主要音楽祭で作品発表を続け、優れた功績を残している。

また、平成17（2005）年からは自主企画公演として、「ニンフェアール」を主宰。公演ごとに様々な企画を打ち出し、テクノロジーの利用や、映像作家とのコラボレーション、文学をテーマとした公演など、独自の音楽性を追求している。同公演における第10回公演は、挑戦的で優れた公演に授与される佐治敬三賞を、第19回公演は、名古屋市民芸術祭特別賞を受賞するなど実績は十分。

教育者としても名古屋芸術大学、愛知県立芸術大学、千葉商科大学などで教鞭を執っている。その他、アメリカ、ヨーロッパを始めとした海外の教育機関でも特別講演を多数行い、後進の育成にも積極的に取り組んでいる。

これまでに培ってきた豊かな経験と、常に新しい音楽表現を追求し続ける姿勢から、今後もその活動の幅を広げ、さらなる活躍が期待される。

令和7年度 名古屋市芸術賞受賞者の概要

芸術奨励賞 ろんと LONTO 演劇（道化師）



平成 11（1999）年より国内外で道化を学び、道化師としての活動を開始。平成 17（2005）年からは、言葉を用いないノンバーバル表現による独自の作風を確立。同年に開催されたアメリカ道化師世界大会（WCA）では、個人・団体部門共に金賞を受賞し、国際舞台においてもその卓越した表現力と創造性を早くから示している。平成 30（2018）年には、Chang 氏とタッグを組み、道化をはじめとした多様な表現を追求し、広く発信するため「ラストラダカンパニー」を設立。障がいや国籍を超えて隔たりなく伝わる舞台演劇を創り上げ、当地域を中心とした全国各地での巡演を通じ、老若男女が文化芸術に親しむ機会を広げている。

同年には、演出・美術を手掛けるとともに、自らも出演した「コメディ・クラウン・サーカス」が厚生労働省児童福祉文化賞（舞台芸術部門）を受賞。令和 5（2023）年には「らふいゆれふいゆ」がこども家庭庁児童福祉文化賞推薦作品受賞。さらに、愛知県芸術文化選奨文化新人賞も受賞するなど、その活躍は近年ますます高く評価されている。

道化師としての活動にとどまらず、自身の身体表現技法を活かし、劇団指導や伝統芸能との共演にも取り組む。さらに、教育機関や企業向けの研修など、多様な分野へ活動の場を広げている点も特徴と言える。こうした唯一無二の創作活動を通じて舞台演劇の新たな可能性を切り開く LONTO 氏の挑戦は、今後さらなる飛躍が期待される。

令和7年度 名古屋市芸術賞受賞者の概要

芸術奨励賞 ^{しばた}柴田 ^{まい}麻衣（45歳） 美術



昭和54（1979）年、愛知県生まれ。平成14（2002）年、名古屋芸術大学大学院美術研究科美術専攻同時代表現研究を修了。平成16（2004）年、ギャラリーDECO（名古屋市）にて初個展を開催。以降、当地域を中心に東京都、大阪府、京都府などで多数の個展を開催するなどして活躍を続けている。

平成25（2013）年には若手作家の登竜門とも称される「VOCA展」で奨励賞を受賞。その後も平成29（2017）年に、個展「重層する風景（第一生命ギャラリー／東京都千代田区）」を開催。平成30（2018）年には「Art Next 3 不透明なメディウムが透明になる時（電気文化会館／名古屋市）」、平成元（2019）年には「情の深みと浅さ（ヤマザキマザック美術館／名古屋市）」などのグループ展にも出展。令和5（2023）年の「愛知県美術館コレクション展（愛知県美術館／名古屋市）」では、同美術館に収蔵されている柴田氏の作品が展示された。

柴田氏の作品は「空間・風景・思想」を独自の視点で描き、精神性、哲学性、内面世界の表現技法に卓越している。抽象と具象を織り交ぜ、独自のレイヤー構造で光と色の静謐な奥行きを表現し、観る者の感情や思索を喚起する独自の作品世界を構築。作品テーマは、歴史、宗教、環境問題など多岐にわたり、年々その活動を深化させている。

こうした挑戦的な創作姿勢は着実に評価を高めつつあり、新たな表現領域を切り開くさらなる活躍が期待される。